

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月7日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520361

研究課題名（和文）20世紀初頭のインド旅行記におけるアジア主義と黄禍論の日英比較研究

研究課題名（英文）A Passage to India: Pan-Asianism, the Yellow Peril, and Anglo-Japanese Travelogues in the 1920s

研究代表者

橋本 順光 (HASHIMOTO YORIMITSU)

大阪大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：80334613

研究成果の概要（和文）：

1920年代の日本ではアジア主義の高まりとともに仏跡巡礼が流行する。そしてその先駆者鹿子木員信は、インド独立運動扇動の咎で強制送還された。日英の外交文書の調査により、事件以降、日本人のインド旅行者への監視が常態化し、旅行記もその記述を多く含むことがわかった。一方、インドから来日し、神智学東京支部を設立したアイルランド出身のジェイムズ・カズンズに注目することで、柳宗悦の友人グルチャラン・シンなど、アジア主義者の人脈が従来以上に複雑な広報活動と密接であることを明らかにできた。

研究成果の概要（英文）：

Kanokogi Kazunobu, Japan's pioneer of the modern Buddhist pilgrimage, was deported from India in 1919 on a charge of supporting the Indian independence movement. Research into diplomatic papers in Britain and Japan make it clear that almost every Japanese tourist after the Kanokogi case was monitored and reported on by the Indian people with regard to whether they were making contact with revolutionaries or Pan-Asianists. By contrast, Irish theosophist James Cousins came to Japan and worked with the Black Dragon Society. Although Cousins had been suspected of propagating Pan-Asianism, his activities, including setting up the Tokyo lodge in 1920, turned out to be more international and complicated. For instance, Gurcharan Singh, the founder of Indian pottery, was inspired by the universal brotherhood of theosophy through Cousins and, produced ceramics imitating Korean white porcelain which Muneyoshi Yanagi and Takumi Asakawa had highly appraised.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：各国文学・文学論

キーワード：黄禍論、アジア主義、オリエンタリズム、日英関係、トゥーリズム、日本郵船、神智学、仏蹟巡礼

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、黄禍論の言説と小説との関連について、日中同盟の脅威を誇張した言説が、日露戦争後、日本とインドの同盟が及ぼす大英帝国への脅威を訴える言説へと変化し、それが娯楽小説に援用されたことを既に指摘した。

こうした転換の端緒となったのが、1893年のシカゴ宗教大会である。東洋の太古の叡智を召喚し、友愛に基づく共同体を呼びかけた神智学運動は、インドにおいてダルマパーラ(Dharmapala)らによる仏教復興運動を引き起こし、独立運動を誘発した。英語圏のインド研究では以前から研究されてきたが(邦語では川島耕司『スリランカと民族』(2006))、近年、神智学が日本に対しても仏教復興運動に刺激を与えたことが指摘され、シカゴ大会での神智学を媒介とする日本とインドの仏教者の交流が注目されるようになった(Snodgrass, *Presenting Japanese Buddhism to the West*(2003)および佐藤哲朗『大アジア思想活劇』(2008))。

その点で示唆に富むのは、アイルランド人の関与である。Gauri Viswanathanの*Outside the Fold*(1998)以降の研究が示すように、インドのアディヤール(Adyar)にある神智学本部には多数のアイルランド人が訪れ、神智学ネットワークで重要な役割を果たした。大英帝国の中心を迂回して「辺境」間が連携しはじめたのが同時代だっただけに、日本のアジア主義がインドへ波及することを英国は極度に警戒したのである。実際、Poplewellの*Intelligence and*

*Imperial Defence*(1995)がわずかに指摘したように、1919年に仏蹟を巡礼した鹿子木員信は、インド独立運動の煽動を疑われ、強制送還された。20世紀初頭から1930年代まで日英で盛んに書かれた旅行記とスパイ小説は、こうした社会情勢と無縁ではなく、黄禍論に言及するものも多い。

しかし、インドをめぐる日本のアジア主義と英国の黄禍論との相互交渉は研究が少ない。岡倉覚三に関連して断片的に言及される以外、わずかに Cemil Aydin の *The Politics of Anti-Westernism in Asia*(2007)がみられるくらいである。英国のインド旅行記についても、*Travellers' India*(1979)以来の蓄積があるが、日本との関連に注意したものは皆無である。また日本のインド旅行記については、田中雅一の論文「大東亜共栄圏のインド」(2000)以外、そもそもほとんど研究されていない。

いずれの先行研究にしても、日英のインド旅行記が共有していた生々しい駆引きと、それゆえに喚起された黄禍論的あるいはアジア主義的ヴィジョンへの考察が欠落している。例外的に、Poplewellは、英国官憲の報告資料に注目しているが、諜報史研究であるため、当然のことながら、日本のインド旅行記や文脈はまったく考慮されていない。

## 2. 研究の目的

そこで目的を、大きくわけて以下の3点に集約した。

(1) 20世紀初頭の英国における黄禍論と

アジア主義との関連を解明する。インド旅行記の総合的な分析のための基礎作業として、インド独立運動と日露戦争との関連について、主に言説史の観点から明らかにする。

(2) 鹿子木員信の『仏蹟巡礼行』(1920)を、インド旅行記と仏蹟巡礼記の系譜から位置づける。鹿子木事件の重要性は、前項で述べたようにすでに指摘があるが、インド旅行記や仏蹟巡礼記のどのような前史の中にあつて、その後の旅行記にどのような影響を与えたのか、詳細を明らかにする。

(3) 日英印のアジア主義をめぐる宣伝と反宣伝のネットワークを発掘し、アイルランド人の関与を含め、その重層性を解明する。鹿子木が帰国後、インド独立運動に強い関心を抱き、ラース・ビハーリー・ボースなどに接触したことはすでに指摘がある。その際、これまで看過されてきた文化的なアジア主義運動において大きな役割を果たした神智学の活動と、それに対する英国の宣伝活動とを比較対照する。

### 3. 研究の方法

鹿子木やカズンズの記述に従って、英国の外務省文書を国立公文書館にて、インド省文書を大英図書館にて調査した。並行して日本外交文書を調査し、両者の照合を行った。関連して、日英の新聞雑誌記事を調査し、記事との比較を行った。

日英のインド旅行記について、20世紀初頭に公刊されたものを幅広く収集し、上記関連資料との比較と分析を行った。

### 4. 研究成果

(1) 20世紀初頭の英国における黄禍論とアジア主義との関連。

英国における黄禍論研究のための基礎作業として、20世紀になって多く参照されたチャールズ・ピアソンの世紀末における著作を分析し、ピアソンがインドと中国の成長を恐れていたこと、しかし、それは文明

の遷移というよりは没落としてとらえていたことを指摘した。こうした黄禍論は、日露戦争後、日本のアジア主義がインドの独立運動を刺激したとして、警戒されるようになる。その過程を、これまで見過ごされてきたチェスタトンやミットフォードなどの言説から明確に浮かびあがらせることができた。また同じ例として、英国で範例としてまで評価された武士道が、アジア主義への警戒から黄禍論の論拠へと反転していった過程も詳述した。一方、アルフレッド・ステッドが英国で反黄禍論を宣伝するにあたって日本政府に援助を依頼した事実を発掘し、従来のイメージ論とは異なる複雑な日英交渉の一端を明らかにすることができた。

(2) インド旅行記と仏蹟巡礼記の系譜における鹿子木員信の『仏蹟巡礼行』(1920)

おおまかにいって、日本におけるインド旅行記には欧州航路の途上で書かれた付加的なもの、専従的な仏蹟巡礼記に大別できる。そもそも仏蹟巡礼は、釈迦への伝記的関心に基づく近代的な産物であり、欧米での仏教復興運動の影響が色濃いとはすでに指摘があるが、その先例として、稲垣満次郎が中心となったタイからの仏骨奉迎に注目した。英国で発見されタイに寄贈された仏骨の一部を、さらに「仏教国」日本に奉迎した稲垣の意図として、東洋版モンロー主義という稲垣の持論と、インドなどでの仏教復興運動の影響を挙げた。関連して、「仏教国」という区分の登場と、その関心からタイ旅行記が増加するに伴い、山田長政が再評価され、多くのアジア主義的小説に登場している事例を新たに発掘した。アジア主義の先駆者として山田長政の事績が異人種間ロマンスとして再創造され、インド旅行への途上において特権的に言及され

たことを指摘した。

調査の結果、仏蹟巡礼が、仏教者以外に広く開かれたきっかけは、鹿子木員信の『仏蹟巡礼行』(1920)であることが明らかになった。一方で鹿子木は、インド独立運動を煽動したとして、1918年に英領インド政府より国外退去を命じられている。日本のアジア主義がインド独立運動を煽動するという脅威が、いわば現実化したとして英国に衝撃を与えたのである。こうした英国への衝撃と日本の対応の詳細は、大英図書館および国立文書館の官憲側の記録と、日本側の記録とを初めて照合することで可能となった。鹿子木はインド滞在中に、私信を開封され、その内容が独立運動を幫助しているとされたのだが、以降、鹿子木に限らず、日本人のインド旅行者には密偵が尾行し、内偵することが常態化することとなった。その時の記録である鹿子木の『ヒマラヤ行』(1920)と『仏蹟巡礼行』は、後続のインド旅行記で基本文献として言及されている。そして、従来、看過されがちではあったが、これら日本のインド旅行者もまた、インドで監視された体験を鹿子木に言及しながら記している事例を多く発掘できた。

(3) 日英印のアジア主義をめぐる宣伝と反宣伝をめぐるネットワーク。

日英印におけるアジア主義と黄禍論を結ぶキーパーソンとしてアイルランド系神智学徒ジェイムズ・カズンズの重要性が明らかになった。カズンズは1919年に、おそらく野口米次郎の招きで来日し、慶應義塾大学で英詩を講じた。その滞在はわずか一年足らずと短いながら、黒龍会の英文雑誌 *Asian Review* の編集に協力し、1920年には神智学協会の東京支部を設立した。カズンズの日本滞在記 *New Japan*(1923)と日英の外交資料を精査することで、カズンズが反

英やアジア主義にとどまらない独自のネットワークを築き上げたことが明らかになった。この成果の一部は、「アイルランド神智学徒のアジア主義—ジェイムズ・カズンズの日本滞在(1919-1920)とその余波—」と題して、『アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究—日英間に広がる21世紀の地平—』日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」藤田治彦代表(大阪大学大学院文学研究科, 2013年3月)に寄稿した。一例としては、従来、インドの「陶芸家シング」としてしか知られていなかったグルチャラン・シンが挙げられる。シンは、浅川巧ととともに青花辰砂蓮花文壺を囲んだ写真が残っているが、今回の調査で、シンは東京工業学校で陶芸を学び、神智学の東京支部に加入する一方で、カズンズと共通の友人である柳宗悦の誘いにしたがって朝鮮半島を旅し、その際に浅川巧を紹介されたことが判明した。そして浅川や柳の白磁の再評価を援用することで、帰国後のインドで「デリー・ブルー」とよばれる陶磁器を再興した。

鹿子木とカズンズを調査した結果、英国が日本で宣伝要員として雇ったロバートソン・スコットの活動の詳細も明らかになった。スコットは、第一次世界大戦中から戦後にかけて、ドイツの脅威を煽ることで日英同盟堅持の必要性を日本人に訴え、朝鮮半島の植民地化を黙認する代わりに、インド独立運動に関与しないよう言論活動を行った。そのとき柳田国男が表にでない形で協力した一方で、柳宗悦はスコットからの誘いを断っている。ただ、柳は、宣伝活動の後にスコットと和解しており、三者の英国と朝鮮半島への態度の錯綜が明らかになった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 9 件)

- ① 橋本順光、日露戦争期の英国における武士道と柔術の流行、阪大比較文学、査読無、7 巻、2012、178-198
- ② 橋本順光、日英における移動と衝突—柳、柳田、スコット、リーチの交錯の例から—、「世紀転換期の日英における移動と衝突—諜報と教育を中心に—」報告・論文集、査読無、1 巻、2012、3-13
- ③ 橋本順光、鹿子木員信のインド追放とその影響、「世紀転換期の日英における移動と衝突—諜報と教育を中心に—」報告・論文集、査読無、1 巻、2012、84-91
- ④ 橋本順光、「文明の進化史」日本語別冊解説書、ニール・ファーガソン『文明の進化史』DVD 全 6 巻、査読無、1 巻、2012、1-8
- ⑤ 橋本順光、黄禍論の予言者チャールズ・ピアソン、メトロポリタン史学、査読有、第 7 号、2011、49-65
- ⑥ 橋本順光、ジョージ・バードウッドのインド工芸論、ヴィクトリア朝文化研究、査読有、第 9 号、2011、73-77
- ⑦ 橋本順光、浅川巧とグルチャラン・シン—インドまで伝えられた韓国陶磁器の美—、ソウル国際親善協会主催浅川学術会議報告書「時代の国境を越えた愛 浅川巧の林業と韓国民族工芸に関する研究」査読有、2011、122-131
- ⑧ 橋本順光、近代日本におけるタイ旅行記研究のための覚書、組織的な若手研究者等海外派遣プログラム報告書「日本・タイ相互交流の文学研究のために」、査読無、2011、55-68
- ⑨ 橋本順光、ブラングインの日本と日本のブラングイン、ジャポニスム研究、査読無、30 巻、2010、88-95

[学会発表] (計 14 件)

- ① 橋本順光、サマセット・モームの『九月姫とウグイス』(1922)にみるタイ—光吉夏弥の翻訳(1954)との比較を中心に—、第 4 回大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会—新たなる沃野—(招待講演)、2013 年 03 月 21 日、大阪大学文学部

- ② 橋本順光、世紀転換期の日英における旅行記と外交の相克、阪大比較文学会シンポジウム「世紀転換期の日英における移動と衝突—諜報と教育を中心に—」、2013 年 02 月 06 日、大阪大学文学部
- ③ Yorimitsu Hashimoto、Cultural Unity of Asia? Gurcharan Singh's Rediscovery of the Lotus Pattern in Korea、International Conference of Intercultural Communication-Intercultural Competence and Interaction-(招待発表)、2012 年 12 月 16 日、上海師範大学
- ④ 橋本順光、鹿子木員信の仏績遺礼と国外退去について、阪大比較文学会シンポジウム「英国、インド、日本をめぐるアジア主義とジャポニスム」、2012 年 10 月 02 日、大阪大学文学部
- ⑤ 橋本順光、アイルランド人神智学者のアジア主義—ジェームズ・カズンズの滞日活動とその余波—、阪大比較文学会シンポジウム「英国、インド、日本をめぐるアジア主義とジャポニスム」、2012 年 10 月 02 日、大阪大学文学部
- ⑥ 橋本順光、仏塔の国への憧憬と山田長政幻想 大鳥圭介から長谷川一夫まで、大阪大学・チューラーロンコーン大学 比較文学研究ワークショップ「近代日本におけるタイ表象再考」、2011 年 5 月 27 日、大阪大学
- ⑦ 橋本順光、欧州航路の比較文学—和辻哲郎の『風土』を中心に—基調報告、日本比較文学会第 73 回全国大会ワークショップ、2011 年 6 月 18 日、九州産業大学
- ⑧ 橋本順光、"Asian Design for the Asians? the Lotus Pattern Story concerning Gurcharan Singh's 1920 Visit to Takumi Asakawa in Korea", "New Perspectives on Asian Design and its Histories: Geographies, Chronologies, Methodologies", 2011 年 7 月 22 日、Victoria and Albert Museum (イギリス)
- ⑨ 橋本順光、李朝白磁からデリー・ブルーへ—浅川巧とグルチャラン・シンの交流とその余波、日本比較文学会関西支部関西大会シンポジウム「朝鮮半島の表象と日本社会—1920 年から 1930 年代の美術を中心に—」、2011 年 11 月 26 日、大阪大学

- ⑩ 橋本順光、大英帝国の航路からみた横浜居留地—人種衝突と美術交流のあいだで、日本ヴィクトリア朝文化研究学会、2010年11月20日、名古屋大学
- ⑪ 橋本順光、手塚治虫の「孔雀貝」(1958)にみるタイ—「玉様と私」(1956)と山田長政の悲恋伝説を中心に、大阪大学・シーナカリンウィロート大学・国際ワークショップ、2010年12月15日、Faculty of Humanities, Srinakharinwirot University, Thailand (タイ、シーナカリンウィロート大学文学部)
- ⑫ Yorimitsu HASHIMOTO、"The United Buddhist World? Manjiro Inagaki and the Bone Relic of the Buddha in Thailand", 大阪大学・チュラーロンコーン大学・国際ワークショップ、2010年12月17日、Faculty of Arts, Chulalongkorn University, Thailand (タイ、チュラーロンコーン大学文学部)
- ⑬ 橋本順光、昭和における山田長政伝説の変容—南洋一郎から手塚治虫まで、大阪大学・チュラーロンコーン大学・国際ワークショップ、2010年12月20日、Faculty of Arts, Chulalongkorn University, Thailand (タイ、チュラーロンコーン大学文学部)
- ⑭ 橋本順光、鹿子木員信のインド旅行と国外退去について、「戦前期日本ペン倶楽部の研究—日印文化交流と国際文化政策」(研究課題番号：22320043 研究代表者 目野由希)研究会、2011年1月16日、ホテルアソシア新横浜

[図書] (計3件)

- ① 橋本順光、Yellow Peril, a Collection of Historical Sources, 4vols.、Edition Synapse、2012年10月02日、総ページ数2,018ページ(Introduction 78ページ、日本語別冊解題 21ページ)
- ② 橋本順光、カーゴ・カルト幻想—飛行機崇拜の物語とその伝播、一柳 廣孝・吉田 司雄 編著『天空のミステリー』所収、青弓社、2012、61-79
- ③ 橋本順光、인도 도예가 구차란 상, 백조중 編著 『한국을 사랑한 일본인: 아사카와 다쿠미의 삶과 사랑』, 2011、78-90 (題名意訳「インドの陶芸家グルチャラン・シン」, 白朝鐘編著『韓国を愛した日本人—浅川巧の生と愛』)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

橋本 順光 (HASHIMOTO YORIMITSU)  
大阪大学・大学院文学研究科・准教授  
研究者番号：80334613

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし